烏帽子島灯台

写真１ 現在の烏帽子島の灯台

写真２ 旧烏帽子島灯台

烏帽子島

玄界灘の航路

江戸時代の灯台計画

日本の近代化と洋式灯台

烏帽子島灯台の施設

烏帽子島での遭難

島での生活

灯台と呼子

喜びも悲しみも幾年月

　　烏帽子島灯台の経歴

　　注

呼子鯨組　八幡崇経

烏帽子島

〽玄海の～　島は烏帽子に沖ノ島　鯨潮吹く小川島

わたしゃチラリと　一目でも　せめて姫島　小呂の島

エエコノ　夜明けの霧じゃえ～

昭和５年、北原白秋は懇意にしていた呼子の松浦漬山下家を訪問し、その別荘の童心荘で「松浦潟」「唐津小唄」などの作詞をおこなっている。この松浦潟には、白秋と名コンビであった町田嘉章が曲を付け、翌年にコロムビアから出版された。戦後になり、忘れかけられていたこの唄の良さを見いだし復活しようと尽力されたのは洋々閣の大河内はるみさんであり、その実際の歌は平成 14 年に民謡家の渕英詔先生が復原して、後に持ち歌とされた。（詳しくは当ブログ＃26「『松浦潟』ふたたび）参照）

唐津周辺の名所旧跡を叙情豊かに織り込んだ歌詞と、力強くゆったりとしたメロディーは、玄界灘に開けた松原を擁すこの地域の風情を良く醸し出している。その松浦潟の歌詞の三番目が冒頭のもので、世界遺産登録申請に決定した宗像市の沖ノ島、捕鯨で有名だった呼子沖の小川島とともに烏帽子島のことが読み込まれている。

烏帽子島は、福岡県に属して唐津湾の真北 24ｋｍ沖合にあり、唐津湾から遠望するには遠すぎるが、玄界灘の島々の中でも特に秀逸な島であった。昭和 2 年に刊行された『唐津松浦潟』には、七ツ釜、芥屋大門とならび「我国三大柱状節理の玄武岩の雄として賞すべきもの」と「嶼貌（しょぼう）の面白みと節理の特に秀麗にして、磨滅せざる太古の其儘を存して」いるとされた。[1]　夏期の間だけ唐津海水浴場から遊覧船もでて、唐津の人々にも親しまれていたようである。

この烏帽子島に明治 8 年に設置され、その後 100 年あまり灯台守に守られ、今なお玄界灘を航行する船を導き続けている灯台について紹介をしたい。

玄界灘の航路

玄界灘は、古代より大陸との交通路であった。宗像大社（福岡県宗像市）の沖ノ島は、その航海の目印となり、さらには海上安全を祈る国家的な祭祀の場ともされた。

このような玄界灘の中にあって烏帽子島は、下関、博多から呼子を経て平戸へ行く際の航路上の目印となっていた。近世の航路図によれば、博多方面から沿岸をたどって西へ下る船は、烏帽子島を右手に見ながら壱岐方面や、また南へ転進して小川島を経て呼子や平戸長崎方面に西下していった。

江戸末、天保 11 年（1840）に豊秋亭里遊によって著わされた「小川島鯨鯢合戦」には、中尾鯨組の納屋場がおかれた小川島を中心に、西は壱岐から烏帽子を経て東は玄海島までの海域が描かれている。その挿絵のなかには、千石船が連なって福岡県側から烏帽子島の南側を経て呼子へ向かう様子が描かれている。また、捕鯨の山見の様子を次のように著わし、鯨の通る水路にあたる島でもあったことを記している。

眼たゝきもせず沖のかた見詰し烏帽子の弓手より潮浪あらく吹きあげて

勢美の子持の大敵よせ来ると、遠目鑑にてたしかに見受け･･･

「小川島鯨鯢合戦」

写真 3「小川島鯨鯢合戦図案」 個人蔵

江戸時代の灯台計画

江戸末の天保 4 年(1833)、船の往来が盛んになったため、切木村（唐津市肥前町）の大庄屋伊藤新五右門衛門は、波戸岬（唐津市鎮西町）に難所の目印として「常夜灯」の設置を藩に願い出た。しかし工事半ばで亡くなったため、嘉永 4 年(1851)に息子の三平治が意志をひきつぎ再度願い出た。しかし安政 2 年(1855)、玄界灘にも異国船の往来が激しくなり波戸岬に砲台場が計画されたため、呼子の尾ノ上の冨津倉(ふつくら　尾ノ上公園呼子ロッジ北崖)の地に変更して再度許可願いが藩に出された。これも遅々として進まなかったが、明治元年(1868)にようやく許可され、翌年に完成した。実際に運用されたのは明治 3 年閏 10 月であった。冨津倉の灯台では鯨油を灯し、風雨の夜には薪を焚き、灯台としての役割を果たした。呼子の山崎屋(落合家)が主となり運営されたが、時代の変化もあったのか、建設費の返済もできないまますぐに役目を終えたといわれる。

日本の近代化と洋式灯台

1858（安政５年）、日本はアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと通商条約を締結。 1866（慶応２年）には、イギリス公使パークスと通商条約の追加協定を結ぶとともに、航行安全のための灯台、ブイ、ビーコンなどを日本の各地の開港に備えて建設を推進することとなった。パークスは、灯台建設の候補地を選定するとともに、灯台建設に必要な機器類の購入を英国政府の協力を得て、エジンバラのスコットランド灯台局のD&T.スティーブンソン兄弟に依頼した。そこでスティーブンソンは、機器類の設計、調達だけでなく、日本へ技術を導入するのに適当な技術者として、スコットランド、アバディーンシャーに生まれ、工学を学び鉄道建設に従事していたブラントン(Richard Henry Brunton 1841－1901)を選んだ。このブラントンこそ、烏帽子島灯台を設計した人物であり、後に日本で「灯台の父」といわれることとなった。

1868年(慶応４年)2月、イギリスの商務省から採用通知をうけたブラントンは26歳。同年６月13日にサウサンプトンから日本へ出発するまでの４ヶ月ほどの間に、灯台に関する実地訓練や各地の灯台の見学を行った。

1868年８月８日、横浜に到着したブラントンは、横浜裁判所の灯明台掛の主席技術者として配置された。

1868年11月21日～1869年１月５日まで日本全国を調査し、灯台建設予定地の地形、水深等の測量の他、付近から調達できる資材などについても調査した。ブラントンの手がけた灯台のうち烏帽子島灯台については資材の運搬が困難であると判断し、灯台自体はイギリスから輸入した錬鉄による鉄造構造が採用された。実際の工事は、絶海の孤島の岩島でもあり困難を極めたと言われている。

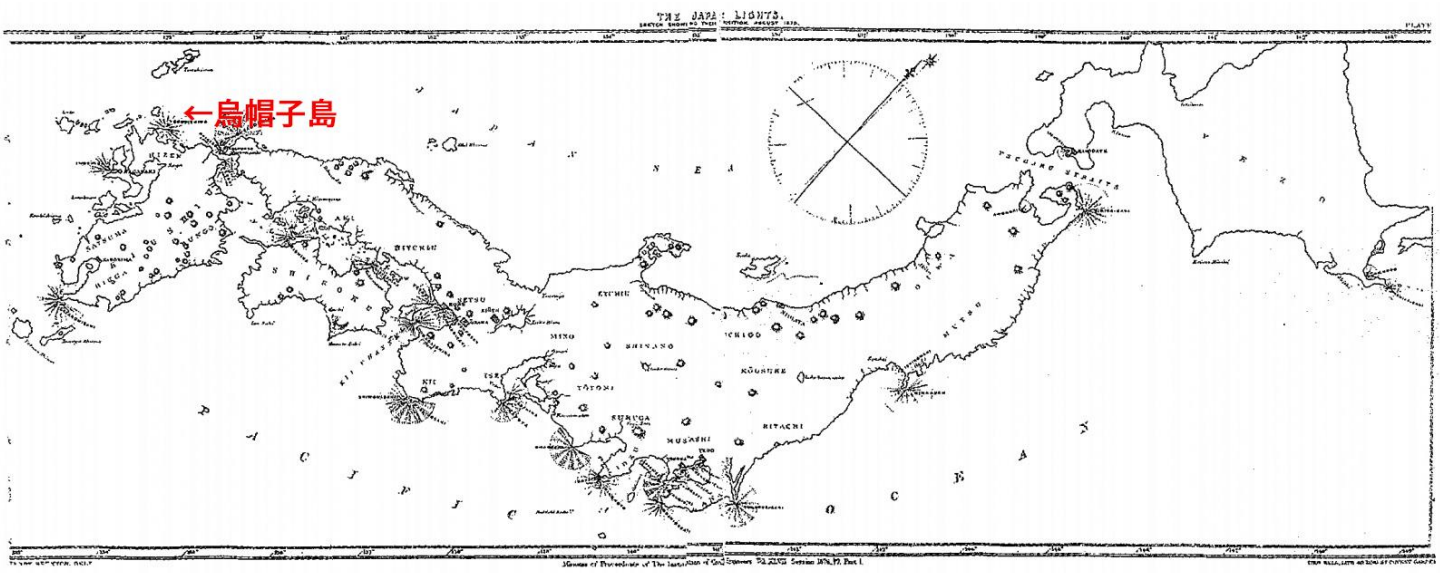

写真４ ブラントンが調査して灯台候補地とした場所の地図（"Japan Light"所収）

工事は1873年(明治6年)8月から始められ、1875年(明治8年)8月1日に初点灯を迎えた。1868(慶応4年)から1876年3月に帰国するまでの在日8年間、建設に関係した灯台等は36基にのぼる。[2]　明治初期に26歳で赴任した若き「お雇い」外国人技術者の仕事としては、短時日でありながらあまりにも膨大であり、どれだけ精力的に仕事を行ったかが伺い知れる。彼の仕事に対する姿は、スコットランド人気質が反映しているともいわれるが、日本の近代化にどれほど影響を与えたことであろう。

烏帽子島灯台の施設

烏帽子島灯台の建設計画は明治5年8月に申請し、起工は明治6年8月23日、完成を翌明治7年12月下旬に予定されていたが遅延し、明治8年6月30日に竣工が延期され、実際の初点灯は明治8年8月1日となった。それほどの難工事だったようで、全ての施設の竣工はさらに遅れて明治9年2月29日とされている。これらは玄界灘の急峻な孤島というだけでなく、灯台本体の鉄をはじめとする資材の多くが輸入品だったため経費がかかりすぎたことなどが指摘されている。そのような中でお雇い外国人技術者からの指導を得た日本人技術者中澤孝政などの活躍もめざましく、数年の間に灯台建設技術を習得していったといわれている。[3]

烏帽子島灯台の建物は、昭和51年に灯塔自体が当初の鉄造から鉄筋コンクリート造に変更されたが、薪置庫以外の建物は改築されながら利用されていた。また唐津海上保安部には、明治期当初の平面図や大正時代の図面、さらには改築当時に在来の姿図として記録された資料が保管されていて往事の姿を知ることができる。それらの資料も参考にしながら宮本雅明九州大学教授による福岡県志摩町の調査が平成18年におこなわれた。その報告書によれば次の通りである。

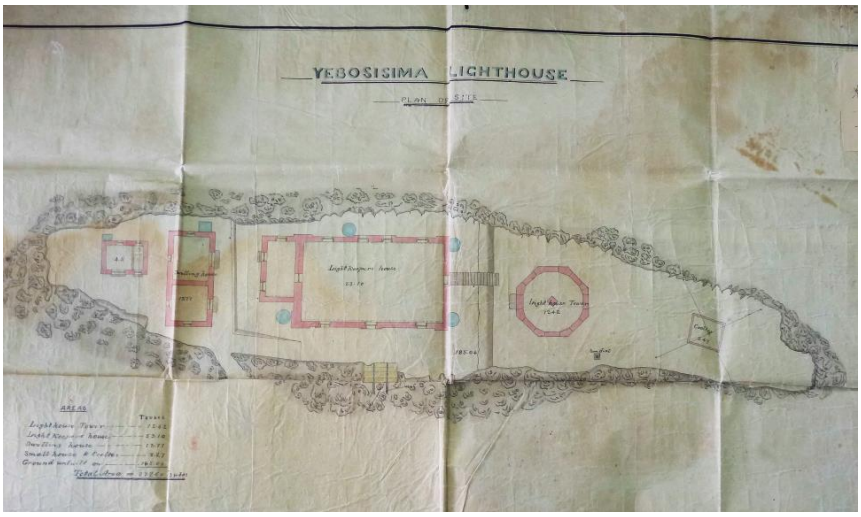

写真５ 烏帽子島灯台の配置図　　唐津海上保安部所蔵

「YEBOSISIMA LIGH THOUSE」と題した烏帽子島灯台と官舎の平面図と大正元年三月調になる「烏帽子島燈台地図」が残され、前者には東方に八角形の「Lighthousse Tower」、中央に「Lightkeeper's house」、西方に「Dwelling house」が描かれ、さらに西端にも小規模建築が描かれる。後者にはそれぞれ「灯台」「官舎」「貯水庫」「薪置庫」と記されている。

鉄造八角形であった「燈台」は昭和50年に鉄筋コンクリート造にて改築され、同時に滞在管理から見回り管理となり、官舎の機能は失われた。

「薪置庫」は現存しないが、「官舎」と「貯水庫」が改修を施されつつも現存する。官舎は石造平屋建、東西15.7メートル、南北8.7メートルを測る主体部の西方に東西2.9メートル、南北6.5メートルの付属部を付す。壁体は四隅の壁を厚くした切石積、三側に三箇所、北側に四箇所の窓を穿ち、窓には片開き鉄扉を吊った金具が残される。南側中央のみ壁を厚くし、両開きの鉄扉を吊り、正面性を造り出している。主体部は内部を木造大壁造の間仕切りで区画し、東側に設けた出入り口から中央に通された中廊下を挟んで、北側に四室、南側に三室が配された平面に復原できる。石造の壁内側には木造大壁造の内壁を張って居住性を高めている。

付属部は南半が風呂場と便所、北半が炊事場として利用され、北側に窓、西側に出入り口と窓、東面に英国から取り寄せた鋳鉄製の暖炉が配される（高松隆之介「文明開化の先駆け九州の海」）。屋根はコンクリートを打った陸屋根に改造されているが、天井裏に木造の小屋組が残されている。他の官舎の例に鑑みると、寄棟造瓦葺であった可能性が高い。

貯水庫は石造平屋建、壁体はルスティカ積、官舎と対照的な意匠を呈する。内部は中央を石造の壁で二室に区画され、それぞれ東側に出入り口、北半は北側と西側、南半は西側と南側に、鉄扉を吊った窓を開く平面に復原できる。石造の壁内側には胴縁を打つためのダボ跡が残されるので、当初は官舎と同様、木造大壁造の内壁が張ってあった可能性が高く、住居として利用されたようだ。その後、貯水庫として利用され、屋根はコンクリート造陸屋根に改造されているが、石造壁体上部内

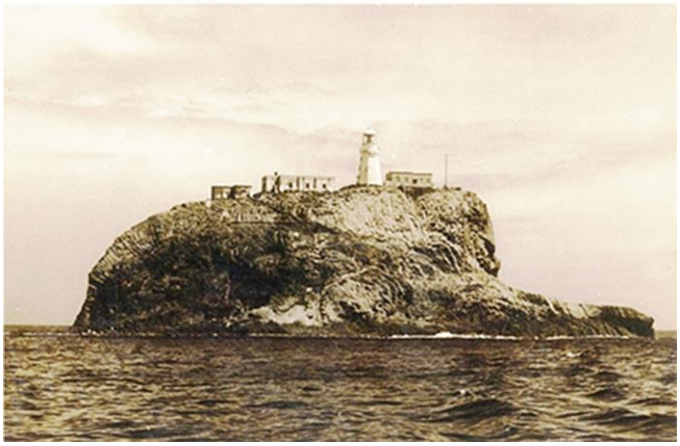

写真６ 建設当初と思われる烏帽子島灯台　唐津海上保安部所蔵

側に勾配を取った屋根の痕跡が残されるので、当初は四周にパラペットを立ち上げた陸屋根であった可能性が高い。

明治期にブラントンが設計した灯台は28基にのぼり、九州・山口地域では鹿児島県佐多岬、長崎県伊王島、北九州市門司区部崎、山口県六連島、山口県角島に建設された。このうち、官舎が残されるのは伊王島、部崎、角島で、いずれも保存措置が講じられている（前掲「文明開化の先駆け九州の海」、柴田建哉「R・H・ブラントンの灯台物語」）。玄界灘の孤島上に難工事の末、建設された灯台官舎として、烏帽子島の官舎も同等の価値を備えていると言える。[4]

烏帽子島での遭難

明治９年１月 25 日、職員交替のために船で向かった灯台守 2 名と呼子の先方・海士町の水夫７名は、悪天候のために転覆遭難した。当時の状況について役所宛に下記のように報告されている。

烏帽子島灯台建築中、灯明番一級見習三浦重行、同一級見習横川祐明、外水夫七名交替ノ為メ呼子退息官舎を出船シ、烏帽子島ニ接近シタル時、裏帆ノ風ヲ受ケテ顛覆シタリ、当時島上ニ在テ施業中ノ職工等之ヲ目撃シタレドモ、船楫ノ備ヘナキヲ以テ、之ヲ救フヲ得ズ、全員九名皆溺死セリ[5]

冬の玄界灘の強風にあおられたのか船は転覆した、工事中の人々には船の装備もなくどうすることもできなかったとしている。その後、遺骸は発見できず、呼子の灯台官舎の東側に墓所を設け、わら人形を納めたと伝えられる。代々の灯台長はこのお墓にお参りを欠かさず、遭難職員の霊を慰め、あわせて海上安全を祈った。遭難者の一人の子孫は、後々まで灯台官舎に雇われて官舎の世話をするとともに、墓参を行っていたという。

（先方･川崎フサエさん談）

写真７呼子の灯台官舎東側にあった遭難者の墓

島での生活

さて、烏帽子島灯台での実際の生活の様子はどのようであったのだろうか。昭和の初めに同島を訪れて聴き取りをして記された思われる紀行文には以下のように記され、過酷なものであったことを想像することができる。

> 雲足は縦絞奔放にかけまはってさッという問もなく、黒雲天にみなぎり、陰惨な空気海上を壓して、凄風一陣、もうもうたる大雨を伴ひきたりて、灯台を打つ、巌窟を打つ、その間を電光の閃きが走って雷鳴が加はる。たけり狂ふ山の如き怒濤は、うねりをあげて骨破微塵に砕けよとばかりに島を打つ。激浪は百尺高く揚がって島の八合目までも呑み、鉄柵を折り、岩角をくだく。濛々晦々、島は根底よりグラグラとくだけで今にも覆へるごとく、物凄さ恐ろしさ、この世の終わりが近づいたかとおもはれる。
>
> 食料品は常備の外に、米二斗四升、木炭、薪各九十貫、焼き塩三斤以上は何うしても備畜用としてキチンと備へつけて置くのだ。これだけあれば粥を作ってすするから、どんなシケにあっても五十日間はもてる。飲料水は船から一回に四石を運んで来て貯へて置く。[6]

烏帽子島灯台の管理は、明治８年以来、呼子村の彦ノ上におかれた「吏員退息所(りいんたいそくしょ)」、通称「灯台官舎」から行われた。呼子港の北端の丘上にあり、ここは烏帽子島を北東に遠望できる場所でもあった。灯台で飲料水や食料が尽きたり、急病人が出た場合の連絡のために、烏帽子島の建物の壁面に大きな黒板を掲げる信号が決められていて、昭和 15 年に無線電話が設置されるまで呼子の灯台官舎から毎日定時に烏帽子島の信号看板を望遠鏡で確認していた。

写真８ 灯台官舎の境界柱

○

呼子港に灯台官舎が置かれたのは、近世以来西海航路の要衝であり、交通交易の港町として物資の準備が容易であったことや、中尾家の鯨組が操業していたことにより、職員交替に使う船や、海域を熟知していた水夫が多くいたことによると考えられる。明治８年の初点灯以来、太陽光発電により滞在勤務が解かれた昭和 51 年までの約百年余り、建物の変遷はありながらも、地元の人々には「灯台官舎」として白亜の建物は親しまれていた。この灯台官舎には、全国から赴任してきた灯台守やその家族たちが住まい、地元の人々との交流がながく続けられた。

無人化と　なりたる灯台官舎には　秋田訛（なまり）の職員も居たり

林富士人（呼子町先方）

灯台と呼子

烏帽子島灯台への灯油や水などの定期的な補給は、戦後民間に委託して行われていた。呼子町の網元中道伊三郎氏が請け負い、同家の船に乗り込んでいた青年や知り合いの婦人などに依頼して島への荷揚げを行っていた。

男は一人一樽、女性は二人で担ぎ、岸壁の船着き場から灯台の貯蔵庫への道を何度も上り下りして運び入れていた。島の岩崖に作られた道は大変狭く急で、樽に入った水が揺れ非常に危険な作業であった。それでもお昼には、船長が用意してくれた食事をすることが、一時の楽しみでもあった。（海士町･前川庄一郎氏　中道エイ子さん　先方･川崎光子さん談）

写真 9 灯台への補給作業従事の地元婦人

○

灯台守の家族の住んだ灯台官舎は、呼子の古くからの漁師町の高台にあり、西洋風の白亜の建物は異彩を放っていて、地元の子どもたちには別世界であった。昭和初めに生まれた人にとって、子どもの頃の灯台官舎の記憶は次のようであった。

急な坂道を登ると六段程の大きな石段が道の左脇にあり、門柱を基点とした五寸四方の角材が格子状態に組まれ塀をなしております。旧灯台官舎の建物です。格子状の角材も、官舎の壁面も白ペンキで仕上げられており、その場所は近場では見慣れぬ光景であり、一入目に焼きつく感じだったことでしょう。

写真 10 灯台官舎敷地にあった日時計

屋敷の中庭はこぶし大の石が一面に敷かれ、その中ほどに蘇鉄が植えられていました。少し離れて子供の背丈高の石柱が立ち、この台座に石板に刻まれた日時計も設置されていました。また白い平屋建ての洋式官舎には、高さが屋根の庇までもある大きなタンクが雨樋に連結され、官舎の周りに備えられていました。官舎の中に遊びに行くと、廊下に面して部屋が幾つかに仕切られており、その部屋のドアノブが黄色く光って見えます。隣接する保育園の園児には、庭の日時計、官舎を囲む白い格子の木枠、大きな雨水槽、これら地域とかけ離れた光景と雰囲気の異様さは憧れを抱かせる想いでした。

昭和の始め頃、船長に頼みこんで灯台行きの船に便乗し、船が帰るまでの時間、灯台周辺の探検が地域の子どもらの楽しい夏の遊びでした。たまには幾羽もの小鳥が落ちているのにも出会います。「可哀想だが夜の灯かりが原因だ」と職員さんが教えてくれました。

一般の人の島への上陸は認められていません。島の水ぎわは「雷さんのつめ」の宝庫です。それらで一杯にした袋は帰りの良い土産です。楽しさの上に嬉しさも加わる島でした。[7]

写真 11 呼子町先方の丘の上の灯台官舎　昭和 30 年代

喜びも悲しみも幾年月

おいら岬の灯台守は　妻と二人で沖ゆく舟の

無事を祈って灯をかざす　灯をかざす

昭和32年に公開された木下恵介監督による「喜びも悲しみも幾年月」の映画は、灯台守夫婦の姿を描いて大人気を博した。この映画の内容以上に強く印象づける軽快な音楽の作詞作曲を担当したのは、木下恵介監督の実弟で音楽家の木下忠司氏である。平成28年に100歳となった氏は、戦前に陸軍の船舶隊に所属し、太平洋戦争末期の昭和20年2月から戦後まで呼子に駐屯して、主に壱岐水道の警戒任務にあたっていた。その時行き来した玄界灘の中にあって光を放ち、航行する船を導き続ける烏帽子島灯台とそれを守る人々に感動し、この曲のイメージに反映させたと語っている。[8]

> 撮影前の1週間で歌を作ってくれと兄から言われて思い浮かべたのは、陸軍船舶隊にいた戦時中に船から見た玄界灘の孤島の灯台だ。「神々しかった。あんな島で誰が灯をともすのかと思った。陸からでなく海から灯台を見たから、あの歌ができたんです。」

実はこの映画ができる以前の昭和26年には、呼子で「海の花火」という海にまつわる映画を木下恵介監督は撮っている。戦後まもなく物資が不足する中で、木暮三千代、佐田啓二や若き三國連太郎など、松竹映画の主要な俳優が出演したこの映画を呼子で撮ることを勧めたのは木下忠司氏だったという。氏は、戦中に過ごした呼子の風景が懐かしく、親しくなった地元の人々を思い出し、兄木下恵介監督に呼子での映画撮影を強く勧めたと言っている。

○

烏帽子島の灯台は、遠くイギリスから技術を伝えるためにやってきたブラントンや、その指導の下に過酷な環境の中で建設工事に携わった日本人技術者によって造られた。そしてそれは約100年もの間、灯台守とその家族、地元の人々によって維持されてきた近代日本の象徴であった。今では太陽光発電で運用され手間もいらなくなった灯台であるが、呼子に限らずそのむかし、多くの人々にとって灯台は航路を導く明かりというだけでなく、近代という時代を照らした文明そのものであった。木下忠司氏は「神々しかった」と表現する背景には、自然の中での人々の営みの奥に神聖さを感じとったからではなかったろうか。

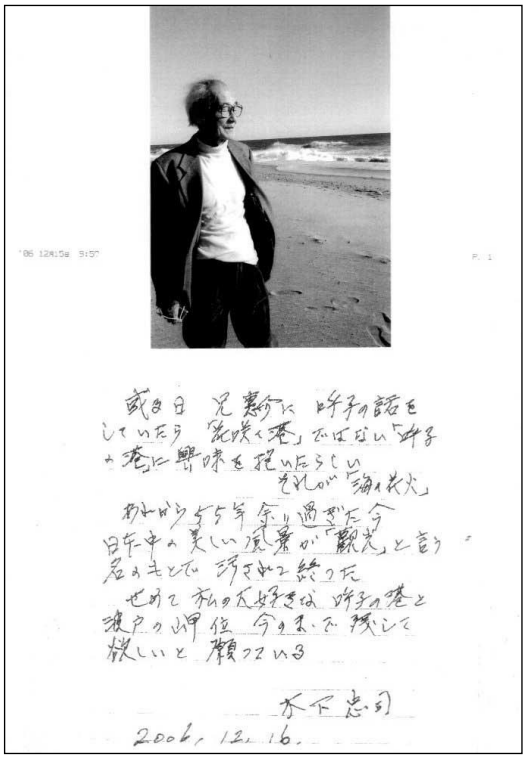

写真12 木下忠司氏からのメッセージ

付記

烏帽子島灯台に関しては、唐津海上保安部所蔵の関連資料を閲覧させていただき、烏帽子島の現在の写真については、糸島市立伊都国歴史博物館の河合修氏撮影のものを利用させていただいた。記して感謝申し上げます。

写真番号　キャプション　　所蔵等　　掲載頁

写真１ 現在の烏帽子島の灯台　平成 18 年撮影 伊都国歴史博物館 河合修氏……1
写真２ 旧烏帽子島灯台　年不詳 唐津海上保安部所蔵 ……1
写真３「小川島鯨鯢合戦図案」 江戸末 個人蔵 ……3
写真４ ブラントンが調査し灯台候補地とした場所の地図（"Japan Light"所収）……4
写真５ 烏帽子島灯台の配置図　大正 11 年調 唐津海上保安部所蔵……5
写真６ 建設当初の烏帽子島灯台　年不詳 唐津海上保安部所蔵……6
写真７呼子の灯台官舎東側にあった遭難者の墓 年不詳……7
写真８ 灯台官舎の境界柱……8
写真９ 灯台への補給作業従事の地元婦人　昭和 30 年代後半 川﨑寿利氏（呼子町）所蔵……9
写真 10 灯台官舎敷地にあった日時計……9
写真 11 呼子町先方の丘の上の灯台官舎　昭和 30 年代……10
写真 12 木下忠司氏からのメッセージ 平成 18 年……11

（参考資料 唐津海上保安部交通課作成）

烏帽子島灯台の主な経歴

明治 6年 6月 1日	イギリス人R・H・ブラントン設計施工、尼崎藩士中澤孝政監督のもと、烏帽子島灯台の建設を開始（退息所は現在の呼子町先方）。
明治 8年 8月 1日	烏帽子島灯台初点灯、八角形鉄造り、不動2等レンズ、不動白光、光達距離約20海里、三重芯石油火口、海面高約55m、2名10日毎交代・滞在管理、建設費約22,500円。
明治 9年 1月22日	交代舟（ろかい舟）が荒天のため転覆、灯台職員2名及び元水夫7名計9名遭難。
明治44年 3月16日	チャンス式（石油）白熱灯に改良。
昭和 8年12月12日	回転装置式（分銅巻上げ式により灯篭を回転）に改良。
昭和28月 8月 1日	烏帽子島航路標識事務所へ改称。
昭和37月 3月31日	呼子航路標識事務所へ改称。
昭和38年 4月17日	石油白熱灯を廃止し、自家発電装置による電気式に改良。（電球1000w、電動駆動回転式、明暗白光明５秒暗５秒）。
昭和50年11月18日	灯塔建替え（白色円形コンクリート造り）、電源を太陽電池式に改良。（電球ハロゲン50w）。
昭和51年 4月 1日	約100年に及ぶ滞在管理を解消し巡回管理へ変更。
平成 7年11月13日	福岡県鳥獣保護区特別保護地区に指定。
平成17年 4月 1日	呼子航路標識事務所を廃止、唐津海上保安部航行援助センターの管理となる。
平成17年 8月 1日	初点灯から130年をむかえる。
平成19年 4月 1日	唐津海上保安部交通課の管理となる。

注

[1] 松代松太郎著『唐津松浦潟』　昭和２年10月１日発行

[2] 五十畑弘著「明治期における英国からの技術移植」（「第7回日本土木史研究発表大会論文集」1987）

橋本敬造著「新しい時代の航路を拓くーお雇い外国人ブラントンの足跡を訪ねてー」（関西大学「社会学部紀要」39-3　2008）

[3] 灯台研究生著「―明治の灯台の話(4)―烏帽子島灯台」（「灯光」2005　３月号）

[4] 宮本雅明著「烏帽子島灯台官舎および貯水庫」（『新修志摩町史』2009）

[5] 「日本航路標識旧記」（「灯光」昭和10年４月号　注３引用より）

[6] 北島磯舟著『九州行脚 第５巻』（昭和４年）

[7] 古里精昭著『だいば周辺追想録』（平成25年　私家版）

[8] 「喜びも悲しみも幾年月 ー田中 績と妻きよー』（朝日新聞Ｔｒａｖｅｌ愛の旅人2008年２月23日）